

【論文】

建築家・佐藤功一と都市への視線、あるいは近代の視線

— 東京市政調査会館及東京市公会堂、早稲田大学大隈記念大講堂を中心に —

米 山 勇 *

目 次

はじめに

1. 佐藤功一の略歴
2. 日比谷公会堂——設計変更をめぐって
 - (1) 後藤新平と帝都復興
 - (2) 日比谷公会堂の建設経緯
 - (3) 入選案の変更をめぐって
3. 大隈講堂と旧早稲田大学出版部事務棟
——都市美観へのさらなる接近
 - (1) 大隈講堂の建築的特質
 - (2) 早大出版部と都市美観の射程
 - (3) 佐藤功一の都市美観論の特質

おわりに

キーワード 佐藤功一 日比谷公会堂 後藤新平 帝都復興 佐藤武夫
音響学 大隈講堂 旧早稲田大学出版部事務棟 都市美観
エクレクティシズム

はじめに

佐藤功一（写真1）は明治11年（1878）7月2日栃木県下都賀郡国分寺村字小金井に生まれ、昭和16年（1941）6月12日東京市小石川の自邸に没した建築家である。

彼は生涯で233の作品を設計したとされる。またその一方で、早稲田大学建築学科の創始者として、日本の建築教育の方面でも多くの事績を残している。しかしながら従来、佐藤についての論究は、様式主義者、住宅学者、都市論者……といった多面的な文脈に終始しており、それぞれをある連関性のもとに総合的に捉えた研究は見られない。また佐藤功一は、日本近代にお

* 当館専門研究員

いていち早く「都市美観」の問題に注目し、多くの発言を残した人物として知られる。しかし、その都市への視線の具体像を明確にした研究も未だない。

本研究は、近現代都市・東京と建築表現に関する研究の一環として、佐藤功一の都市・建築観の特質を明らかにしようとするものである。とくに本稿では、佐藤壯年期の代表作であり、彼の数少ない現存遺構の一つである東京市政調査会館及東京市公会堂（日比谷公会堂、以下同称）についていくつかの問題点を抽出し、それが意味するものについて考察する。ついで、同時期の作品である早稲田大学大隈記念大講堂（大隈講堂、以下同称）と関連建築について論及し、佐藤功一の都市への視線の特質を明らかにするものである。

1. 佐藤功一の略歴

まず、佐藤功一の経歴について簡単に記す。

佐藤功一は明治11年（1878）7月2日、栃木県下都賀郡国分寺村字小金井に生まれた。旧姓は大越であったが、後に大工棟梁・佐藤茂八の養子となり、佐藤功一と名をのることになる。15才のとき上京し、明治33年（1900）に東京帝国大学（現・東京大学）建築学科に入学、同36年に卒業する。帝大での同級生には、佐野利器、大熊喜邦、田辺淳吉らの優れた人材がいた。

帝大を卒業した佐藤は、その年に三重県技師となり、津に赴任する。明治41年（1908）には宮内省内匠寮御用掛として入省するが、同年に辞職、翌年、当時早稲田大学建築学科創設の顧問だった辰野金吾の推薦により、早稲田大学からの在外研究として欧米に渡ることになる。明治43年（1910）に帰国した佐藤は、同年に早稲田大学建築学科所蔵開設された早稲田大学建築科本科の教授に就任、まもなく建築科主任となる。このとき佐藤功一は33才であったが、実質的には欧米留学前の29才にしてすでに建築学科の創設を託されていた。

こうして佐藤は、日本で初めての私学の建築科主任教授となる。その後も彼は、東京女子高等師範学校講師（大正10年・1921）、日本女子大学教授（同14年・1925）を務めるなど、教育の場に身を置く一方、きわめて多くの建築作品を世に送り出しており、京都帝国大学の武田五一（1872～1938）とともに、いわゆるプロフェッサー・アーキテクトの先駆けとされる²⁾。昭和16年（1941）には芸術院会員に推薦されるが、その通知を聞くことなく、佐藤功一は62才で死去している。

2. 日比谷公会堂——設計変更をめぐる

前述したように、佐藤功一が建築家として活動した39年間の上で残した作品は233件に及ぶ。これを計算すると、2カ月に1棟の割合で彼の作品が建てられたことになる。しかし、現存する建築は、年々減少しているのが実状である。東京都内についてみれば、所在の確認が難しい住宅作品やファサード保存等の形で部分的に残されているものを除けば、数棟が確認されるのみである。

日比谷公会堂（写真2）は、都内に現存する佐藤功一の代表作である。この建築は、震災後の帝都復興計画の象徴的な事例であるとともに、東京の先駆的な公会堂建築として、演劇・音楽・芸能文化の中心的な舞台となってきた。ここでは、日比谷公会堂の建築経緯と特質、そして建築の設計と実施にまつわるいくつかの問題点について検証する。

(1) 後藤新平と帝都復興

大正12年（1923）首都圏を直撃し、死者・行方不明者14万人を出した関東大震災の大災害からの復興事業は、震災翌日の9月2日に内務大臣に就任した後藤新平を中心に推進された。余震が続くなか行われた第二次山本内閣の信任式の夜、新内相の後藤新平は「一、遷都すべからず 二、復興費に三十億円を要すべし 三、欧米最新の都市計画を採用して、我国に相応しき新都を造営せざるべからず 四、新都市計画実施の爲めには、地主に対し断乎たる態度を取らざるべからず⁵⁾」との根本策をまとめ、9月6日の閣議に「帝都復興ノ議」として上申した。彼は震災復興を国家事業として推進するため帝都復興院を設立するが、これについては佐藤功一も述べているように「帝都復興といつて復興院の企てる処は、実は都市計画の遂行に他ならぬ⁶⁾」ものであった。震災前の大正10年（1921）、当時東京市長だった後藤は「東京市政要項」を発表している。この計画は街路、下水、公園、学校など15項目にわたる都市のインフラストラクチャー整備を包含したもので、約8億円の予算を必要とする壮大な構想に対しては「大風呂敷」とする批判が投げかけられた。また、彼には佐野利器、池田宏等のブレーンがついており、常に都市計画についての進言をしていた。こうしたこともあり、震災復興都市計画の責任者としての後藤の意気込みは並々ならぬものであった。結局、後藤の帝都復興計画は様々な障害のため大幅に縮小されたが、「かの大震災の直後に当り、



写真2 日比谷公会堂外観写真
撮影筆者

兎も角も、第一次に緊急必要な且つ適切な事業を執行するといふ意味に於いて、復興計画は妥当なもの、そして「復興事業の完成は『禍を転じて福と為す』といふ格言を文字通りに実現した⁸⁾もの」であった。

この帝都復興の問題に関しては、佐藤功一も多くの言説を残している⁹⁾。たとえば「帝都復興と都市建築の理想」の中で佐藤は次のように論じている。

どうぞ婦人諸子と雖も、此の際帝都復興問題に充分の注意を払って、宅内に誇り得る完備した帝都の復興を期するやう、輿論を喚起して貰ひたいものである。地方の人々から集まる租税に依つて帝都の改造をしようとする時機であり、米人の如き外国の人々すら盛んなる義損をなすといふ場合に、帝都の地主で、自分の土地が道路にかゝるが高くなくては手放さぬなどといふ人があつたら、それは恥づ可き事だ。道路が広くなれば残つた所有地の地価も上ることであるし^(ママ)するから、此の際無償提供をなす位な覚悟があつてもよい。¹⁰⁾

さらに彼は「帝都百年の大計を樹つる為には、誠に好い機会を得たものといつて差支ないであらう」、「在来息を吹き込んであつて、而も各種の障害の為に行き悩んで居つた此の都市計画を、此の期に際して思ふ存分決行し得ることは愉快に堪へない」とさえ述べており¹¹⁾、震災という出来事を、むしろ建築・都市の再創造に向けての契機として捉えていることが伺える。このような、現在から考えるといささか特異にも思える言動は、だがしかし佐藤だけでなく、後藤新平、佐野利器といった震災復興の推進者たちに通底する構図であった。そして日比谷公会堂の建築は、市政調査会設立者の後藤新平、後藤のブレーンの一人で帝都復興院建築局長、また市政調査会の理事でもあった佐野利器、そして佐野の盟友で、帝都復興について多くの言説を残した佐藤功一という、震災復興のキー・パーソン¹²⁾の参画によるものであった。落成式に続い

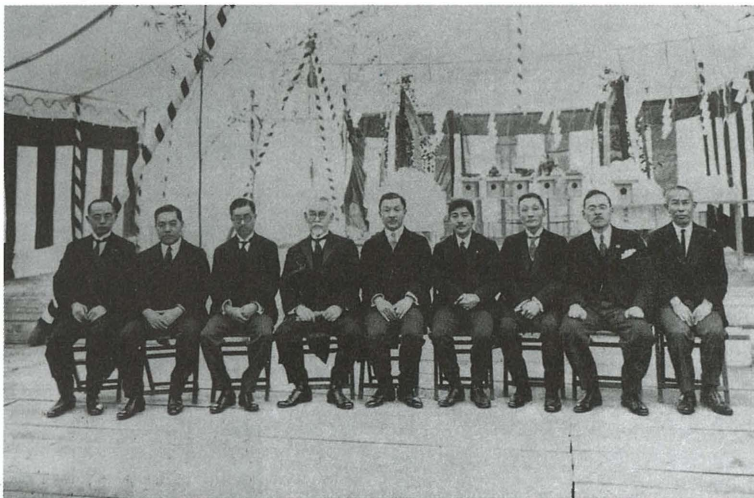


写真3 日比谷公会堂定礎式

『財団法人東京市政調査会四十年史』（東京市政調査会、1962年）より転載
左から四人目が後藤新平、一人おいて佐野利器、さらに一人おいて佐藤功一

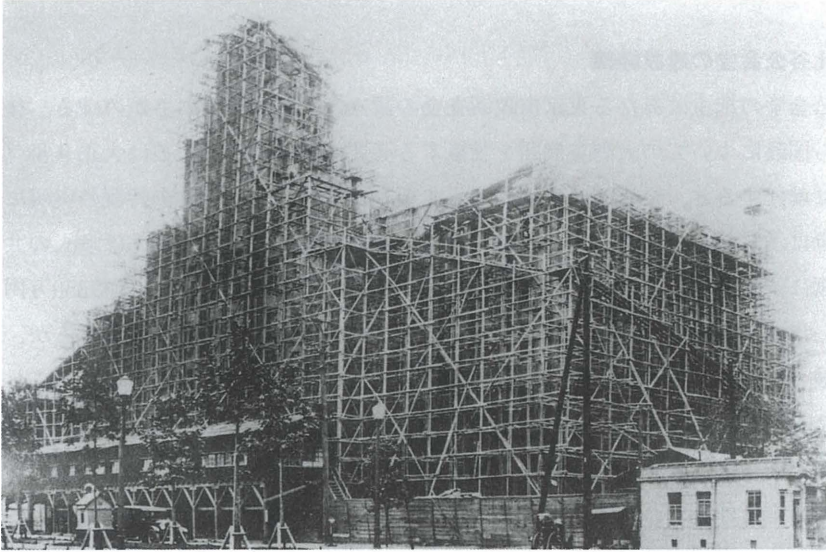


写真4 日比谷公会堂建築中の写真
前掲『財団法人東京市政調査会四十年史』より転載



写真5 絵はがき「(大東京) 日比谷公園に巍然たる東京市公会堂と其附近の景観」
当館所蔵(資料番号88138048)
右手前は日本勧業銀行本店(後述)

て「帝都復興展覧会」の舞台にもなったこの建築は、まさに「復興帝都の集合機関¹²⁾」であり、「復興建築」の象徴的な事例といえることができる。

(2) 日比谷公会堂の建設経緯

日比谷公会堂の施主にあたる東京市政調査会の設立は、震災以前にさかのぼる。後藤新平は、かねてから国政についての大調査機関を設置する必要性を論じていた。彼は、大正9年(1920)に東京市長に就任すると、早速「政治にはまず調査が先行すべし」との持説の実現に向け、その抱負を世に示した。これに対し、安田財閥創始者の実業家、安田善次郎は多大の共感を示し、後藤の計画に賛意を示すとともに、独立機関たる市政調査会の設立に対し経費350万円を寄附する旨を申し出た¹³⁾。安田は大正10年9月28日、神奈川県大磯の別荘にて刺殺されるが、没後に発見された彼の手記に基づき、遺族から後藤新平宛に寄附の申し込みがなされた。これを受け、大正11年2月24日、後藤新平を会長とする財団法人東京市政調査会が発足した。

さて、安田家による寄附申込書には、以下の条件が付記されていた¹⁴⁾。

寄附指定条件

- 一、財団法人東京市政調査会は該寄附金を以て会館（公会堂附設）及第四号に掲ぐる公会堂を建設すること
- 二、会館の位置は日比谷公園の一角東北隅及公会堂は本所横網町安田本邸に選定すること
- 三、会館か日比谷公園内に建設せられたる上は其の建設物中公会堂に属する部分は市の管理に委ね其の管理に伴う収入支出は市に帰属せしむること
- 四、本所横網弊方本邸の建物及庭園を可成現形の儘にて維持し且該寄附金の一部を以て同地内適當の場所に公会堂を建設したる上公園の用に供すべき部分及公会堂は財団法人東京市政調査会に於て更に東京市と協定を遂げ東京市公園及び公会堂として寄附すること

ここに記されているように、安田家からの寄附を受けた東京市政調査会は、本所横網町の安田邸内に公会堂（現・両国公会堂）を、そして日比谷公園内に、それとは別の公会堂及び会館を建てる必要があった。特に後者、すなわち日比谷公会堂の建設については寄附者の絶対条件であり、市政調査会は、その建築に資産のほとんどを投入することとなった¹⁵⁾。

日比谷公会堂の設計は当初、「大正十一年十一月末我国知名の建築士八名を指名選抜して会館設計図案を懸賞競技に付¹⁶⁾」した。このコンペについて、大正12年(1923)4月12日付の『東京日々新聞』は、以下のように報道している。

日比谷に建つ市公会堂の設計図 一等当選の佐藤功一博士

懸賞募集中だつた日比谷公園に建てる建てさせぬで内務省と東京市政調査会とでもめた例の公会堂の設計は三月廿日締切つたが応募十八種のうち佐野利器博士外七名と調査会理事六名で審査の結果十一日次ぎの如く当選した

◇一等（一萬円）早大教授工学博士佐藤功一氏◇二等（七千円）工学士田邊淳吉氏◇三等（五千円）工学士中條精一郎氏

調査会では六月までにすべての予算ををへ評議員会にかけた後今秋からいよいよ工事に着手しおそくも大正十四年度中には竣成させる事になつたがその位置は現在の公園事務所のある地点約一千二百坪で濠に面した六層樓の鉄骨煉瓦づくり、調査会の会館と公会堂とが連続した丁字形のもので八階の塔上までは百二十五尺ある地下室にはレストラン、カフェーや市民に開放すべき大水池トラックその他シャワーバス等があり一階は各種の展覧場二階は舞台つきの約二千五百人を入れ得べき大講堂、これに付屬して中小の講堂、図書室、閲覧室、娯樂室、貸し事務室等がある総工費二百五十万円、すべて安田家の寄付によつたもので右の設計図案は二十一日の午後及び二十二日上野自治会館で一般に縦覧させる一方、この記事の六年半後、昭和4年（1929）10月6日の『東京朝日新聞』（夕刊）は、日比谷公会堂の竣工に先立ち、次のように報じている。

三千人を容れる東京市の公会堂 来る十九日開館式

日比谷公園の一角に建築中であつた東京市政会館は、いよいよ来たる十九日午後二時盛大な落成披露式を挙行することになつた、設計者は建築界の泰斗佐藤功一博士、建物の総坪数は四千八百六十坪で塔の頂上まで十階四十二メートル、工費三百万円である

会館で特に力を入れたのは公会堂で二階三階四階をぶつ通した大講堂、平土間一千三百六十八人、ギャラリー一千三百五十四人がはいるという大きさ

舞台は奥行三十尺、間口六十七尺の大構造で音響の関係から天井はプラツサーおよびインシュライト張りといふ凝つた作りである、舞台の左右は石膏で泥の花模様の装飾その中に会館功労者の故後藤新平伯、故安田善次郎翁の銅像をはめてある

この公会堂は市政会館から管理権を市に譲歩したので市公会堂として使用することになつてゐるが十九日、落成式と同時に帝都復興展覧会を開催する計画で目下準備に忙殺されてゐる

ここでの内容を先の記事と比較したときに見出される諸々の相違点については後述するとして、日比谷公会堂の建設は大正14年（1925）10月に基礎工事が起こされるが、地盤軟弱のためと建築認可の遅延によって予想以上の時間を費やし、昭和4年（1929）10月19日に落成した。施工は清水組があたり、建築費の総額は275万4000円、構造は「耐震耐火の目的を以て鉄骨鉄筋『コンクリート』造¹⁷⁾」としている。こうして竣工した公会堂のデザインは、ゴシックを基調とし、中央に高塔を配したシンメトリカルなファサード、茶褐色タイルと黄色テラコッタという佐藤功一が得意とした素材の組み合わせなどが特色であり、モニュメンタルであると同時に公園の自然との調和も図られたものとなった。壁面周囲に連立するバットレスは、テラコッタの蛇腹を境に細くなっていき、相互の間隔も上方になるにしたがって遮減される。ゴシックの垂直的上昇性を強調した巧みなデザインといえる。座席数2740席、延床面積1万6733㎡はそれま

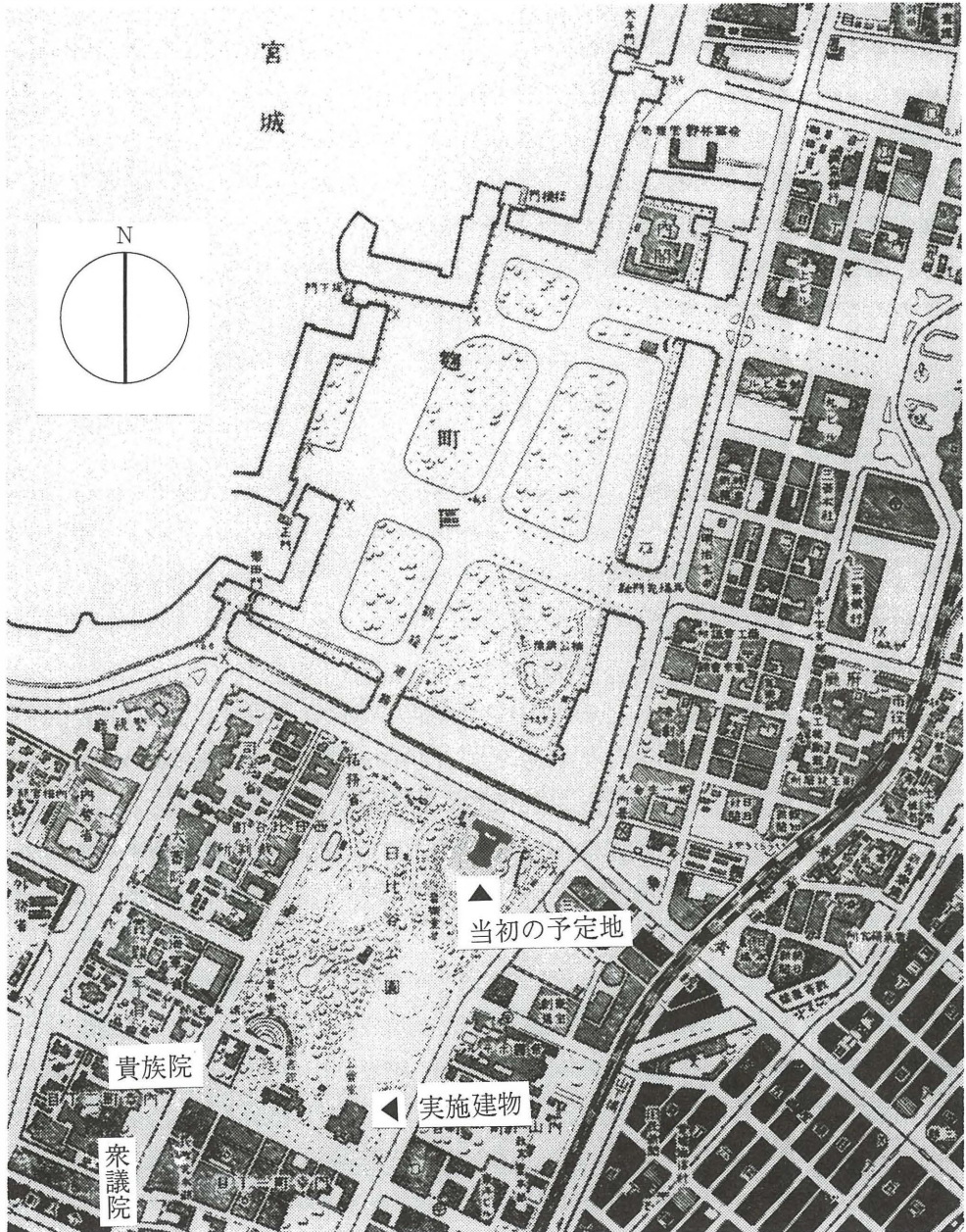


図1 昭和12年敷地図へのコンペ案モンタージュ
『明治・大正・昭和 東京1万分1地形図集成』(柏書房、1983年)をもとに作成。

でに類をみない大規模なものであり、オープニングではオーケストラ、講演、舞踊、演劇が催されるなど、その後の多目的公共ホールの姿を暗示させるものであった。¹⁸⁾

(3) 入選案の変更をめぐって

日比谷公会堂の建築史的様態を考えると、とくに注目すべきことは、懸賞設計での入選案と実施された建築とが大きく異なっていることである。その主な変更点は、以下の通りである。

1. 建物の敷地の変更
2. ホールの形状の変更
3. 全体的な意匠の変更

これらの変更は、なぜ行われたのであろうか。順に検証してみよう。

1については、前述の寄附指定条件および設計競技規定に「日比谷公園内東北隅」と明記されていたように、当初の予定では公園の花壇に面した北東隅に敷地が指定されていた。それに對し、実施された（現在の）建築の位置は同公園の南東隅であった。

この変更の原因として指摘できるのは、当初から日比谷公会堂の建設に反対していた内務省の存在である。日本において「公会堂」の名称を附した建築が建設されるようになるのは明治中期頃からとされるが、¹⁹⁾当初その機能の中心は演説や討論を主目的とした集会施設としてのそれであった。大正中期頃になると、公会堂における音響的側面についての意識が萌芽し、演劇や音楽などの舞台芸術空間としての性格が附加されていくようになるが、ひきつづき既存の集会場としての性格は継承されていた。日比谷公会堂の建築認可が申請された大正12年頃は、民衆運動が未だ活発に繰り広げられ、それに対する政府の取り締まりが徐々に強まっていた時期である。一方、日比谷公園の位置は、議院に近接しており、大衆運動の拠点となった場合にその取り締まりに困難を生じる恐れが内務省の間で紛糾した。こうした問題を巡る議論の結果、²⁰⁾建築敷地を日比谷公園南東隅にする妥協案がとられたのである。

昭和12年（1937）の敷地図に懸賞設計案の配置図をモンタージュし、図1に示す。議院（衆議院と貴族院）は日比谷公園の南西側に位置しており、単純な距離の点からみれば、実施位置の方が議院にやや近いことになる。しかし、公園の南西側には大音楽堂および図書館があり、公園南東隅部から西側へのアプローチは、ある程度隔離されていたとみることができる。また、建築は市政会館と公会堂のコンプレックスであり、コンペ案、実施案ともに公会堂部分は公園の内側に置かれている。これらを考え合わせるならば、当初予定された敷地の場合、公会堂から流出した民衆が公園西側に抜け、司法省から議院へと流れ込む可能性が大きかったものと考えることができよう。²¹⁾

2のホール形状については、入選案では単純な矩形だったものが、実施案では釣鐘形に変更されていることが指摘できる。また断面形状についても、当初は平らな平土間形とされていた床が、段状の床に改変されるなど、ホール全体の形状がダイナミックなものになっている（図

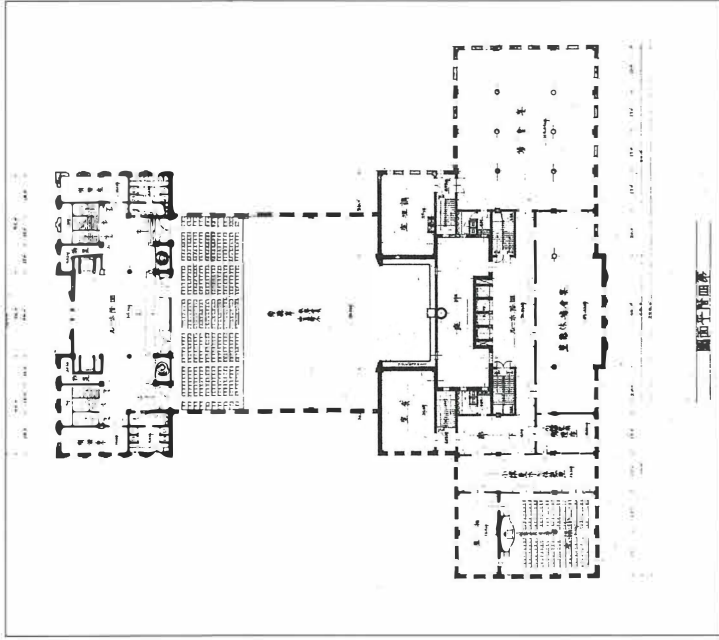


図2 日比谷公会堂設計競技入選案 4階平面図
『東京市政調査会館競技設計図集』（東京市政調査会、1923年）より転載

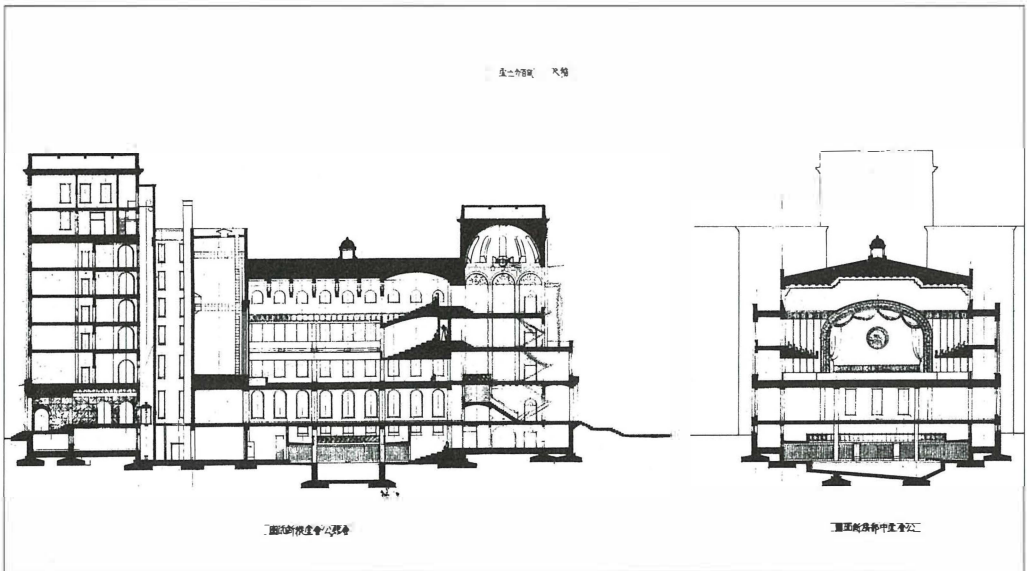


図3 日比谷公会堂設計競技入選案 断面図
前掲『東京市政調査会館競技設計図集』より転載

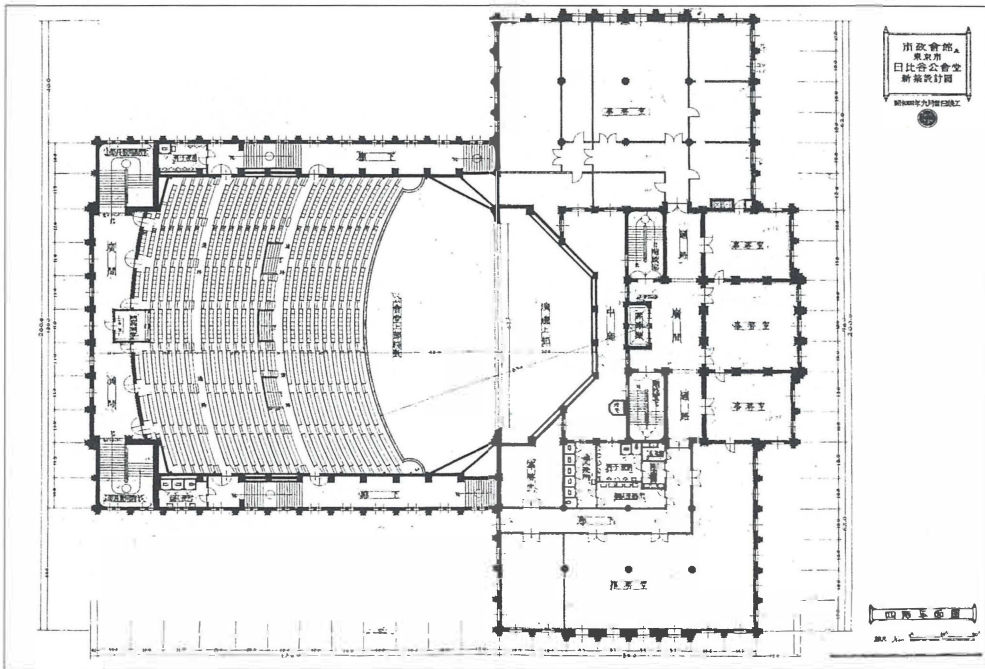


図4 日比谷公会堂実施案 4階平面図
東京都日比谷公会堂所蔵

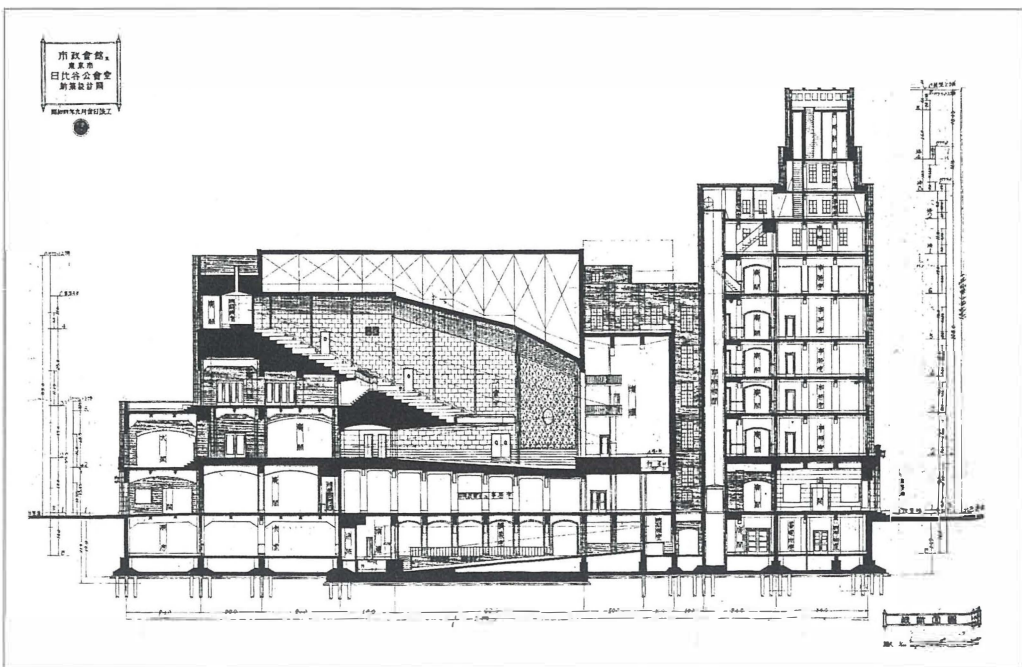


図5 日比谷公会堂実施案 断面図
東京都日比谷公会堂所蔵

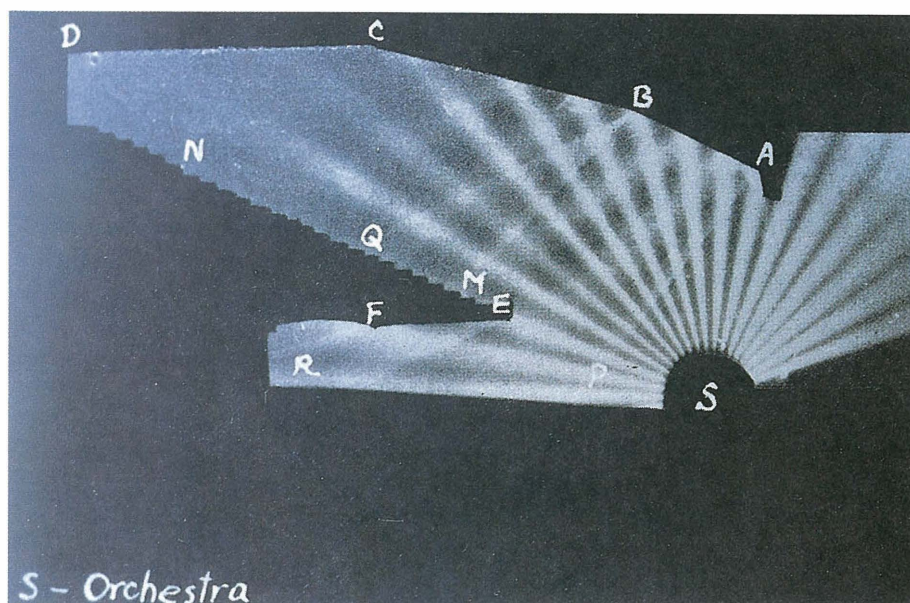


写真6 煙箱法による日比谷公会堂の音響実験写真
佐藤武夫「武者窓」(相模書房、1941年)より転載

2～5)。これらについては、日比谷公会堂の音響設計を担当した佐藤武夫の存在が重要な意味をもったものと考えられる。

日本の音響学の分野では、明治中期頃から、主として物理学者グループによって研究が始められ、教育の面では大正10年(1921)に黒川兼三郎による早稲田大学での講義が始められている。その後、佐藤武夫、池谷(川島)定雄、船越義房らによって、残響・吸音・遮音・室の形状などに関する活発な研究が進められるが、特に建築音響の初期に佐藤武夫のはたした役割は大きかった²²⁾。それまでの「建築音響」といえば、意識の萌芽こそあれ、明確な理論に基づいた科学的アプローチによるものではなかった。たとえば、日本における公会堂建築の先駆的存在である大阪市中央公会堂(大正7年・1918/設計;岡田信一郎・辰野金吾)では、演壇から客席後方に向かって、数本の針金を渡していた。これは、音を針金に反射させることにより、良い残響を得ようとしたものであった。このように、室内の音響が悪いときは針金を張り巡らせたり万国旗をぶらさげるといったような、現場調整の方法が真剣にとられていた時代だったのである。²³⁾

一方、佐藤武夫は大正14年(1925)に黒川兼三郎と共に宝塚大劇場の音響状態の調査報告²⁴⁾を行い、残響時間、劇場の形態について改良すべき点を指摘している。この調査は、当時設計中であった大隈講堂の音響設計を得るために行なわれたものであった。佐藤武夫は、オーディトリウムの聴感性の面においては、室の形状がきわめて重要であることを指摘していた²⁵⁾。また彼

は「大隈講堂の設計を機にそこの音響が心配になつて勉強したのが発端²⁶⁾」と述べていることから、日比谷公会堂の懸賞設計競技の段階（大正11年で、大隈講堂の竣工以前）では、科学的論考の裏付けによる「音響計画」の方法論は十分に確立されておらず、故にホールの形状も単純な矩形であったものと考えられる。一方、実施設計に当たってはじめて佐藤功一は、大隈講堂での実績に鑑み、その音響計画を佐藤武夫に委任したのであろう。その結果、ホールの平面形状・断面形状ともに複雑なものになったと考えられるのである。²⁷⁾

最後に、3の全体的な意匠変更については、上記1、2の要因の総合に加え、震災による耐震構造理論の先鋭化を挙げることができる。大正12年（1923）9月1日に関東を襲った大震災は、日本の建築界に地震国における耐震構造の必要性をいやが上にも認識させ、鉄筋コンクリート構造の本格化を促進した。日本における最初の本格的な全鉄筋コンクリート造建築は、明治44年（1911）竣工の三井物産横浜支店（設計；遠藤於菟^{えんどうおと}）であるが、当初はもっぱら耐火構造としての役割が注目されていた。鉄筋コンクリートの耐震構造としての面に注目し、優れた業績を残したのが、前出の佐野利器である。佐野は、明治39年（1906）にサンフランシスコ地震を視察し、そこで倒壊せずにいた建物が鉄筋コンクリート構造によっているのを見て、その耐震性を確信した。彼の耐震構造理論は、大正4年（1915）に発表された学位論文「家屋耐震構造論」としてまとめられ、社会的評価を獲得した。その成果はやがて、弟子にあたる内藤多仲に引き継がれることになる。日本における耐震構造技術の父といわれる内藤は、佐野が開拓した耐震構造学を受け継ぎ、それを実践レベルにおいて応用し、日本における鉄筋コンクリート構造の普及・発展の筋道を築いた。内藤が「架構建築耐震構造論²⁸⁾」において確立した耐震構造理論は、関東大震災によって立証され、後に大隈講堂（昭和2年・1927）、世界平和記念聖堂（昭和28年・1953）、日本電波塔（東京タワー 昭和33年・1958）等、多くの建築において人々の目に示された。²⁹⁾

佐藤功一もまた、関東大震災を契機に鉄筋コンクリートの耐震性に注目し、多くの発言を残している。大正9年（1920）に書かれた「日本独特の建築法」で彼は、「最もよく新文明に対応するところの建物の性質は、先づすべての災害に対して安全であるといふこと」であるとし、「日本独特の木造建築は、比較的よく此の目的に適ふところのものである。依つて自分は、此の我国特殊の建築法の益々発達して行くことを希望せざるを得ない」、そして「我国現在の木造建築法は、今後とも益々向上させることが、我々の当然の義務であると信ずるのである³⁰⁾」と述べている。このように、震災前の佐藤は、むしろ伝統的な木造建築法の発達に期待を寄せていたようである。一方、震災後に書かれた論文で彼は「私共は寧ろ今回の地震によつて、合理的の鉄骨、鉄筋コンクリート造ならば、高さ百尺位の高層な建物であつても、ピクともしないことを実験したのである³¹⁾」と述べているように、震災を契機に鉄筋コンクリート造の耐震性に対する確信を強くする。さらに佐藤は、「此の度の震災でそれが実験され鉄筋コンクリートの構造の内では如何なる方式のものが最も耐振性に富み、又如何にする方が耐火的に良好であるかと

いふ事が一層明瞭になつたのであります」と述べた上で、「此度の地震に於て最も耐震的に丈夫に出来るのは、鉄骨で骨組を作り之をコンクリートで包み、是等鉄骨の間に鉄筋コンクリートの壁を作るにありといふ事が証明されてをります。大きなそして高い建築をするには、勿論此の構造による事を最も良いとします」(傍点筆者。以下、特に注記のないものは筆者による³²⁾)と論じている。ここで言われている「此の構造」が、鉄骨鉄筋コンクリート造を指しているのは、いうまでもない。

日比谷公会堂の設計競技入選案における「設計概要」によれば、建物の構造は当初「主要軸部は鉄骨及鉄筋コンクリート造、壁体は煉瓦積」としていた³³⁾。それに対し実施建築は、構造を鉄骨鉄筋コンクリート造とし、外壁をタイル張りとしている。佐野利器、内藤多仲の両者とも



図6 日比谷公会堂設計競技入選案 外観透視図

親交が深かった佐藤が、震災を跨いで行われた日比谷公会堂の実設計にあたり、理想的な耐震構造である鉄骨鉄筋コンクリート造を採用したことは、必然的なことであつたといえよう。

以上のように、日比谷公会堂の建物全体の意匠変更については、敷地の変更、ホール形状の(三次元的)変更、そして構造の変更と

表1 佐藤功一設計の官公庁関連建築——『佐藤功一博士』(彰国社、1953年)に写真掲載のもの

竣工年	建築名称	用途	様式
昭和2	岩手県公会堂	公会堂	ゴシック
昭和2	都城市公会堂	公会堂	ロマネスク*1
昭和4	米子市庁舎	市庁舎	古典様式(ルネッサンス)
昭和4	市政会館及び東京市公会堂	会館+公会堂	ゴシック
昭和6	宮城県庁舎	県庁舎	古典様式(ルネッサンス)
昭和12	広島市公会堂案(未実施)	公会堂	古典様式*2
昭和12	皇室林野局庁舎	官庁舎	古典様式(ルネッサンス)
昭和13	滋賀県庁舎	県庁舎	古典様式(ルネッサンス)
昭和13	栃木県庁舎	県庁舎	古典様式(ルネッサンス)
昭和15	福島県庁舎案(未実施)	県庁舎	古典様式(ルネッサンス)

*1: 手持ちの資料では細部が不鮮明な為、全体の印象から分類。

*2: P. ベーレンス、A. シュペーア等、20世紀の新古典主義に近い造形。

いう要素の相乗が、その要因としてあったと考えることができるが、ここでさらに公会堂のデザインの基調となっている様式に言及するならば、入選案(図6)ではルネッサンスであったが、実施設計では垂直性を強調したゴシックが採られていることが指摘できる。ルネッサンスとゴシックは、ともに佐藤が得意とした様式である。かつて佐藤功一の事務所に十余年勤務した大矢信雄は、「先生は、都市の町並みのなかにたてるものとしてはルネッサンス、何か記念的な独立した建物にはゴシック、そういった考えでやられていたように思われる」という興味深い証言を行っている³⁵⁾。この大矢の言説はそれなりの信憑性はあるとはいえ、必ずしも正確なものとは言いがたい。たとえば、佐藤功一の得意としたビルディング・タイプの一つである庁舎建築は、ほとんどすべてがルネッサンスを基調としており、なおかつその多くは「記念的な独立した建物」だからである(表1)。逆に、昭和2年(1927)竣工の大隈講堂はゴシックを基調とした作品であるが、無造作に「独立した」建築として扱うことは、後述するようにこの建築がもつ重要な意味を見落とすことになる。

そこで考えられるのが、公会堂というビルディング・タイプへの視座である。表1を見てわかるように、佐藤功一が設計した官公庁関連の建築はほとんどがルネッサンスを基調としているが、公会堂については、ゴシックを基調とした設計例を指摘できる。また、岩手県公会堂が竣工した昭和2年(1927)には、日比谷公会堂における音響学的実践の発端となった大隈講堂が、そして翌年の昭和3年には、やはり佐藤設計の武蔵大学講堂がそれぞれ竣工しており、いずれもゴシックを基調としたデザインがとられていた。これらの講堂をその範疇に入れば、市民に開かれた場としての「会堂」への視座の発露、そしてそれにふさわしい造形として、垂直性を強調したゴシックが採用された可能性も考えられよう。とくに日比谷公会堂の場合、単なる公会堂ではなく、欧米の「タウンホール」のような役割を担う市政会館への期待があった。大正13年(1924)に書かれた「都市美論」のなかで佐藤は、次のように述べている。

多くの封建都市は発生上所謂The City crownで、中央に高く群を抜いて立てる宮城を核心として、其周囲に群がる聚落から成立つてゐる。欧州の古いカセドラル・タウンに於ては最も早く発達した北欧の商業都市、ニーデルランド地方の是等の都市には、核心とし
市^{タウン・ホール}庁が高く聳えてゐる。これは中世期の都市の独立と殷富とを反映する。(中略)是等の市庁は都市の中心広場に面して建ち、広場の周りには取引所、銀行、商業会議所、各商業組合の建物が並び、広場として用ゐられ、所謂シビック・センターを形造るものである。

東京丸の内付近を人はシビック・センターといふが、東京にはシビック・センターはないといつてよい。其処に宮城の周りに諸官庁が並んで居ても、それは帝都としての中枢区域であつて、東京市民のシビック・センターではない。³⁶⁾

この提言がなされた5年後に当該地区に竣工した日比谷公会堂が、東京市民のシビック・センターの中心としての役割を担っていたことは、容易に想像できる。ここで重要なのは、佐藤の理想とするシビック・センターが「帝都としての中枢区域」ではなく、開かれた「東京市民

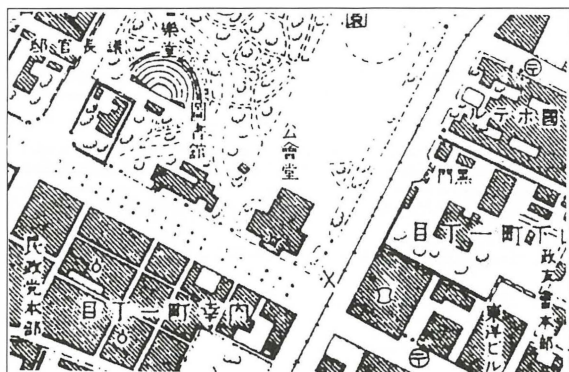


図7 敷地周辺拡大図

前掲「明治・大正・昭和 東京1万分1地形図集成」より

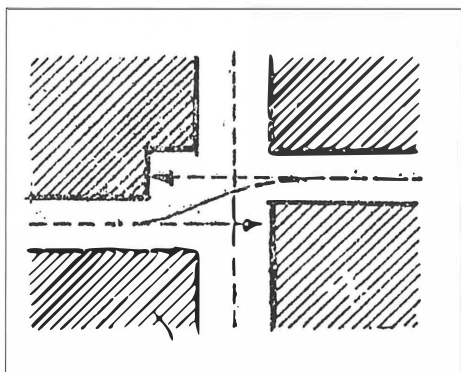


図8 「都市の美観に就て」におけるスケッチ・1
「建築雑誌」(1923年12月号、日本建築学会)より転載

のシビック・センター」として、しかも「都市美」の文脈において語られていることである。ここに、佐藤功一という建築家の特質が表出されているように思われる。冒頭で述べたように、佐藤功一は、日本近代においていち早く都市美観の問題に注目した建築家として知られる。とくに震災復興期に書かれた「家並と街路樹」のなかで彼は、「都市の美観のためには、一街衢に千変万化の建物を建てることは禁物である」としながら、「けれども広場とか、街路の交差点とかには変化を必要とする³⁷⁾」と述べる。そして「斯ういふ場所は、建物も一般標準より抜き出して高くし、天空に対する変化も、壁の凹凸も、色彩も、すべて変化多く見えるやうに意匠すべきである」と論じている。日比谷公園という広場、そして二本の道路の交差点に面して建てられた日比谷公会堂の実施案は、「抜き出した高さ」、「天空に対する変化」、「壁の凹凸」、などの点において、設計競技案に比して大きく変化のあるものとされたのである。

しかしさらに注目すべきは、日比谷公会堂が面する交差点の形状である。この交差点は、規則的な十字路ではなく、一方の道路の幅員半減により、「突き当たり」を生じている(図7)。

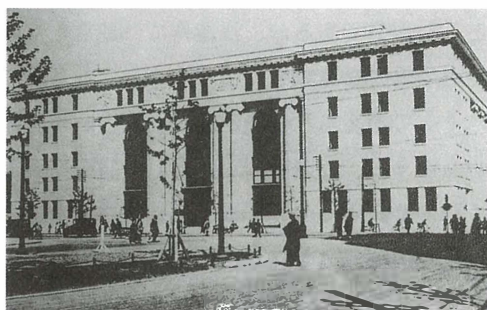


写真7 日本勸業銀行本店外観
「建築家 渡辺節」(大阪府建築士会、1969年)より転載



写真8 現在の日比谷公会堂と第一勸業銀行
撮影筆者

このような交差点の形状は、「都市の美観に就て」³⁸⁾で佐藤が提示する「第五図」(図8)、すなわち「街路の交差すべき所、しかも其の交差路の各が一直線をなし得ぬ場合」に合致する。そこで佐藤は「交通の支障さへなければ、そこに集る街路はこういふやうに喰違ひになる方が美観上に於ては却ってよい場合があるといふ事がいひ得らるゝのであります。なぜかといふと各の街路からそのつき当りの美しい建築が望み得られるからであります」と述べているのである。

日比谷公会堂の主たるファサードが面する道路が突き当たる地点には、渡辺節の設計によるルネッサンス様式の重厚な日本勧業銀行本店(写真7)が、公会堂と同じ昭和4年(1929)に竣工している。当時の銀行建築は、古典様式によって設計することが定式であった。また勧業銀行の施工を担当したのは日比谷公会堂と同じく清水組であり、佐藤功一が勧業銀行の図面を目にした可能性も十分に考えられる。いずれにせよ、日比谷公会堂と同年に竣工することになる勧業銀行について、ルネッサンス様式が採用されることは佐藤功一にとって容易に予想できたはずである。このことから、水平性の強い勧業銀行を対面道路の突き当たりを持つ日比谷公会堂の設計に当たり、佐藤がそれとは対照的なゴシックの垂直的造形を投じ、両者の対照がもたらす視覚効果を意図した可能性は大きい。³⁹⁾ 実際、版画家の小泉癸巳男が「昭和大東京百図絵 版画 第三十五景 市政会館と勧業銀行」(図9)の構図に用いているように、両建築のシルエットの対照は、絵画的な効果をもって、当時の人々の目に映じられたことと思われる。このような効果は、敷地の制約などによって偶然にもたらされたものとは思われない。都市美観に関する言説を数多く残した佐藤功一が、日比谷公会堂の実施設計に当たって、勧業銀行との造形的連関性を念頭に入れなかったとは、むしろ考えにくいからである。⁴⁰⁾

以上、述べてきたように、日比谷公会堂の意匠変更は、佐藤功一がしばしば論じていた都市美観への志向が、震災という出来事を契機として実際に具現化されていくことを示す事例の一つであると捉えることができる。そこで選ばれたゴシック様式という手法は、歴史的規範としての「様式」というよりは、都市美を構成するための一方途というべきものであった。

このような「様式的なるもの」⁴¹⁾の解体は、佐藤と同時代に生きた建築家たちにも概ね指摘し得るものであった。村松貞次郎は、佐藤功一のように明治後期に大学を卒業した建築家の様式認識について、次のように論じている。

つまり、辰野式ルネッサンスにみられるゴシックのルネッサンス化と、片山東熊の赤坂離宮(明治42年)に代表されるネオ・バロック様式にみられるルネッサンスのバロック化と見えがかり上の華やかさにおいて、両者は明治の国家を飾りたてるといふモニュメンタリズムに合致してくるのである。このモニュメンタリズムを介した様式的野合は、その後の日本における折衷主義建築の性格を決定づけることになった。赤坂離宮が完成する前後、すなわち明治40年前後に大学を出た建築家、たとえば佐藤功一(明治36年帝大卒)、渡辺節(明治41年帝大卒)、長谷部鋭吉(明治42年帝大卒)らは、大旨折衷主義的建築家であり、彼らは、様式的野合の上になつて、あらゆる様式をこなしはしたが、決して様式の純粹性



图9 小泉葵巳男「昭和大東京百図絵版画 第三十五景 市政會館と勤業銀行」(昭和7年) 当館蔵 (資料番号91210500)

を求めることはしなかったからである。⁴²⁾

ここでの確に指摘されているように、佐藤功一らの様式へのアプローチは、様式的言語を自在に駆使こそすれ、様式的なるものに遡及していくようなものではなかった。言いかえれば、⁴³⁾彼ら折衷主義的な建築家たちにとって、従来のいわゆる「明治の建築家」たちを束縛した様式的なるものの拘束性はすでに効力を失い、解体の過程にあった（明治の建築家が規範とした19世紀ヨーロッパの建築界が、すでにそうであったように⁴⁴⁾）。そのとき、個々の様式的言語は、元来それらが引きずっていた歴史的な文脈から分離され、建築家自身の方法論的文脈へと引き寄せられていったのである。⁴⁵⁾そして佐藤功一の都市への視線においてその文脈は、都市美観への方途＝「風景としての様式」にほかならなかった。それをより明確化するには、今一つの事例を通じ、佐藤功一の都市認識に接近しなければならないだろう。

3. 大隈講堂と旧早稲田大学出版部事務棟——都市美観へのさらなる接近

(1) 大隈講堂の建築的特質

都内に現存する佐藤功一の作品の内、日比谷公会堂とならぶ代表作としてあげられるのが大隈講堂（昭和2・1927、写真9）である。前述したように、日比谷公会堂におけるオーディトリウムへの音響学的アプローチも、その2年前に竣工した大隈講堂においてすでに開示されていた。早稲田大学創立45周年を記念して建設され、昭和2年に竣工した大隈講堂だが、当初の

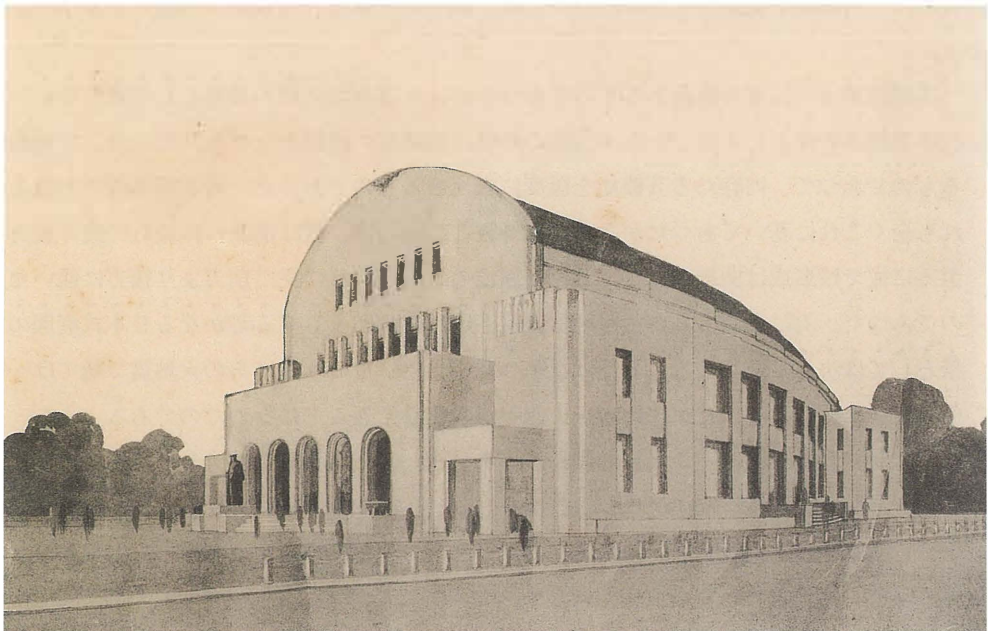


図10 大隈講堂設計競技一等案

「早稲田大学 故大隈総長記念大講堂競技設計図集」（洪洋社、1923年）より転載



写真9 大隈講堂外観 撮影筆者

設計は日比谷公会堂と同じく懸賞設計競技によっており、一等が前田健二郎・岡田捷五郎（図10）、二等が水谷武彦、三等が矢部金太郎であった。しかし、当選案は実施されず、懸賞委員の一人であった佐藤功一の指導の下に、弟子の佐藤武夫が実施図面を担当することとなった。なぜ懸賞設計の当選案が廃棄されたかについては、以下の佐藤功一の言説から読みとることができよう。

当選図案はそれぞれ特色あるものであつたが、大隈会館の庭の背景として適しない。これは最初参考図として示したあの図案の外壁は観聴席の鐘形をなせる其壁に沿ふて彎曲せるものであつて、内容たる其機能を極度に表現せるものであつた。当選図案の平面図も孰れも全くこれに基いてあつたが為めに、外観甚だ動的に、壁は前面のみ徒らに高く後方に至るに従て段形或は曲線をなして低く、屋根の形も亦これに従て前方より後方に傾いたものであつた。為に会館のあの古典的な書院とこれに調和をもてる静かなる日本式庭園の背景としては決して適當せるものではなかつた。(中略)そのうちにあの大地震で総ては一時中止といふことになつたが、愈大正十四年から着手することになつたのである⁴⁶⁾。

建物に北面する大隈庭園との景観的調和の不十分さが、当選案破棄の大きな理由であつた。ここでの発言は、通常考えられるように建築の一部として庭園を配するのではなく、庭園の「背景」として建築をとらえる視点が特徴的であり、都市の美観を構成する要素として建築を考えた佐藤の都市・建築観の一端を示している。

また大隈講堂の建築的特質を見るとき、ゴシック様式を基調としながら、その塔を左右対称を打ち破つた大胆な正面構成としてまとめていること、あるいは大学校舎群の中央軸線からズ

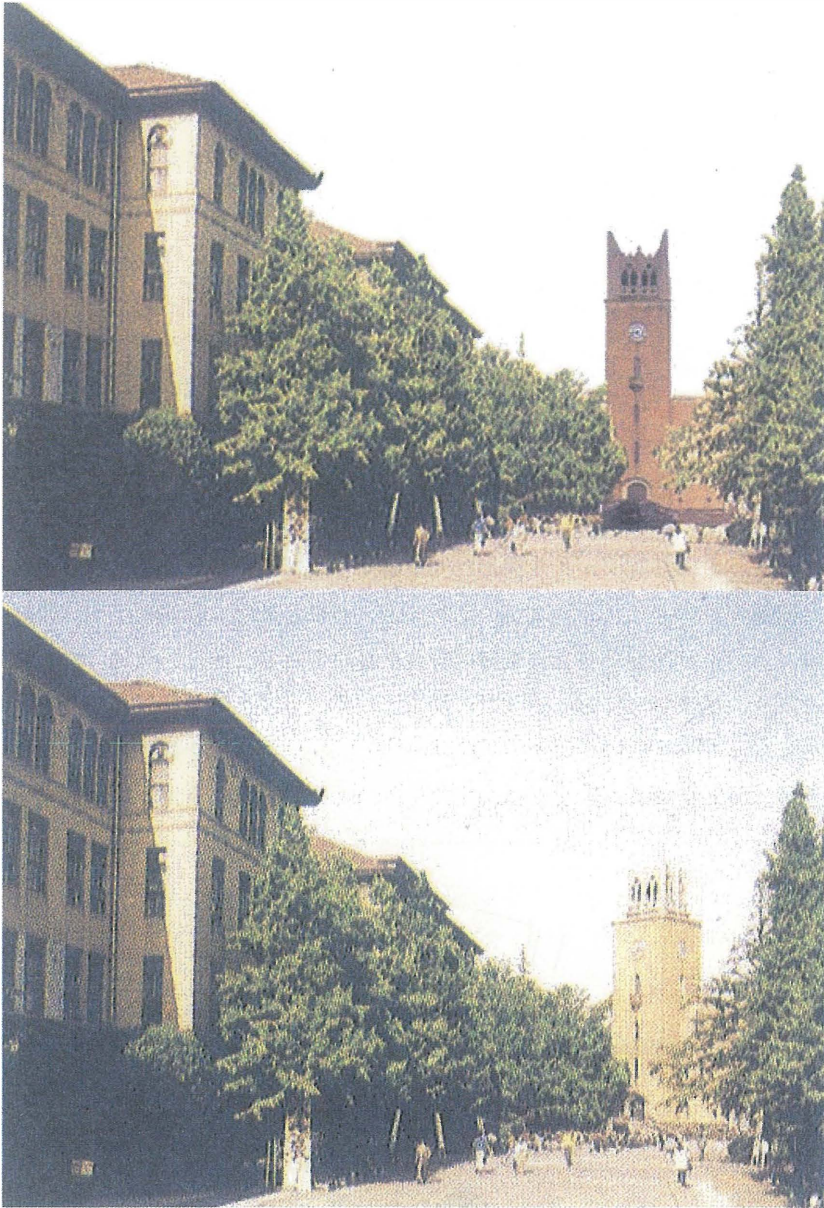


図11 早稲田大学キャンパスから大隈講堂を望む映像のモンタージュ
上は、キャンパスの軸線に対し、垂直になるよう加工したもの。

ラした配置によって、周囲の景観に動的に連続させていくピクチャレスクな手法等⁴⁷⁾が指摘できる。これらの手法は、従来の大学キャンパスの構成手法としては特異⁴⁸⁾であり、その効果は図11に示すようにキャンパス側から望んだ風景に顕著である。

さらに重要なのは、大隈講堂と通りをへだてて建っていた、やはり佐藤功一の設計による同じ昭和2年(1927)竣工の旧早稲田大学出版部事務棟(以下、早大出版部)の存在である。大学講堂建築の代表例として、東京大学大講堂(安田講堂、大正14・1925/設計;岸田日出刀)と並んで広く知られる大隈講堂に対し、この建築はほとんど知られておらず、研究書等でも触⁴⁹⁾れられたことがないものである。

(2) 早大出版部と都市美観の射程

早大出版部の敷地は東京都新宿区戸塚町一丁目、早稲田大学本部キャンパスの東隣にあり、正門前の大通りを隔てた向いに大隈講堂が建つ(図12)。構造及び規模は鉄筋コンクリート造3階建であるが、東端及び南端の部分は2階建としている。建物の平面は敷地の形状に沿って、南北・東西のそれぞれの軸が垂直でなく、若干ふれた形となっている。北西角の部分が切り取られ、エントランスを構成している(図13、および写真10)。

建物の外壁は全体が陶器質タイルで覆われ、屋根回り及び窓枠にはテラコッタが張られている。このような茶褐色のタイルと淡黄色のテラコッタの組合せは、前述のように佐藤功一の得意とした手法であり、日比谷公会堂にも用いられたものである。また、角地に建つ建築の平面の角を切る手法も、都市の中における建築に対して佐藤がしばしば用いたものであった。この他、佐藤が好んだ八角形平面の煙突や、両開きの窓の上部に回転窓を設ける窓構成等に佐藤の作風の特徴をみることができる。窓部は、現状において、二組の引き違い窓が並列される構成

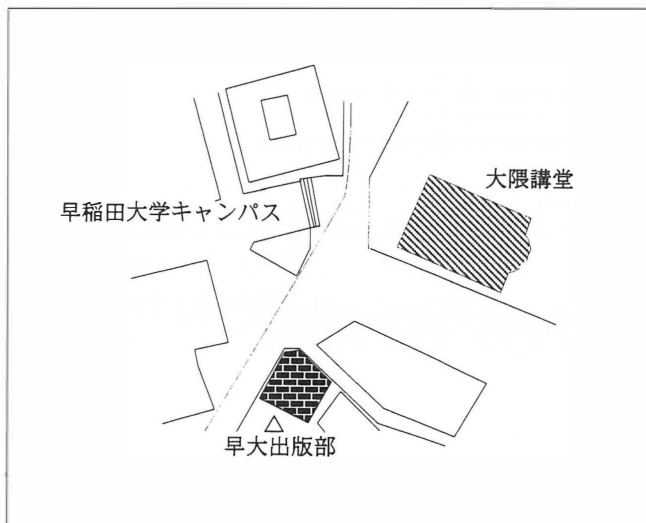


図12 大隈講堂と早大出版部の敷地関係図

となっているが、竣工当時の資料写真（写真11）によれば、当初は窓枠と同材のテラコッタ張りと思われる方立てが二本立っており、それが三つ並んだ縦長窓を仕切る構成になっている。即ち、縦長窓の三連による一単位を窓枠のテラコッタが囲むことによって、結果的に横長のプロポーションが得られているのである。当時の建築意匠の潮流としては、縦長窓が明らかに主流であり、横長の窓は稀であったことを考えるならば、斬新な手法である。これらのことは、⁵¹⁾縦長窓という組積造の伝統との連続性の一方で、既存の技術からの解放を求めた佐藤功一の新機軸を語るものであり、すでに述べたような佐藤の様式に対するアプローチに通じるものといえよう。

しかしここで注目したいのは、建築各部の特質よりも、建築と都市美観論の関わりについてである。先に述べたように、早大出版部の平面において、南北・東西のそれぞれの軸の交わる角度は直角ではなく、敷地の形状に沿った鋭角になっている。さらに高さについては、正面（北西面）側の部分が3階建であるのに対し、東端及び南端の部分は2階建と、一層分低くされている。これらの表現は、建物正面側からのパースペクティブを強調し、（実際よりも）深い奥行き感を所与しているのである（同

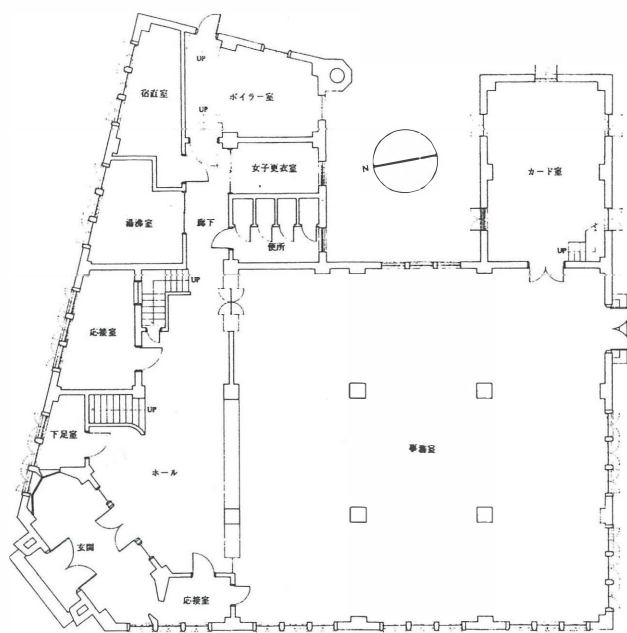


図13 早大出版部 | 階復元平面図
早稲田大学建築史研究室所蔵

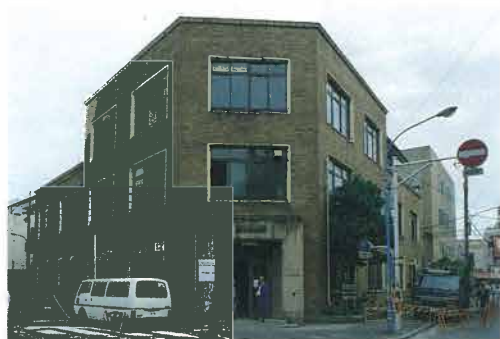


写真10 早大出版部外観(現状)撮影筆者

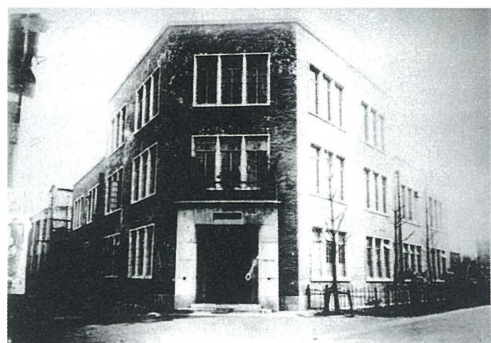


写真11 同(竣工時)早稲田大学大学史編集所所蔵

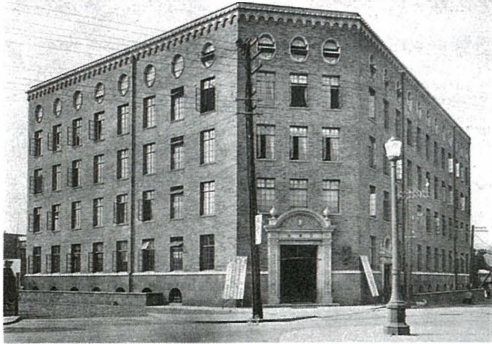


写真12 三会堂外観
前掲「佐藤功一博士」より転載

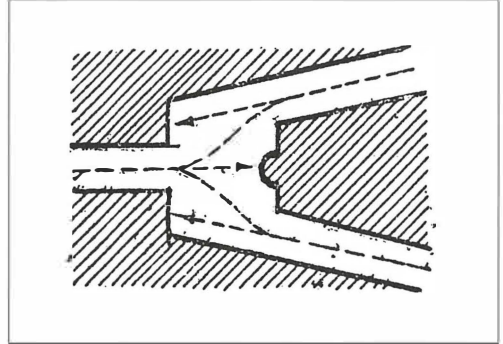


図14 「都市の美観に就て」におけるスケッチ・2
前掲「建築雑誌」1923年12月号より転載

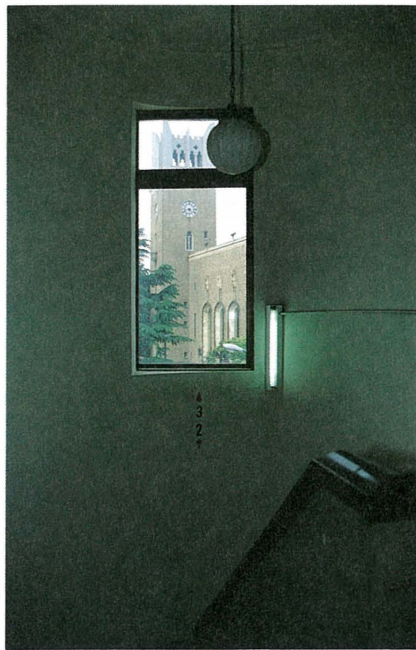


写真13 早大出版部階段室最上部踊り場窓より大隈講堂を望む
撮影筆者



淀橋区・早稲田大学街

昭和大東京百図絵版画完制判第 五十六景 昭和九年十月作

小泉癸巳男

図15 小泉癸巳男「昭和大東京百図絵版画完制判 第五十六景 淀橋区・早稲田大学街」（昭和9年）
当館蔵（資料番号95202885） 大隈講堂の右手前が早大出版部

年竣工の類似した全体像をもつ三会堂（写真12）と比較すると、その手法の効果が理解されよう）。佐藤功一は、都市美観に関する一連の言説の中でも、平坦に展開する市街地での景観こそ建築家が考えなければならないものであると主張し、特に複数の道路が交差する地点等での建築の景観上の役割に注目していた。⁵²⁾ 図14は前出の「都市の美観に就て」で佐藤が用いたものである。ここで彼は「街の美観と云ふものは廻り角とか十字と云ふ様な要所々々に集中されるべきものと思ひます⁵³⁾」と語っているが、早大出版部の建築が建つ位置はまさに三本の道路が交差する分岐点であり、図に合致している。

また、建築が竣工した昭和2年（1927）には、隣接する敷地に同じ佐藤功一の手による大隈講堂が竣工している。これら二つの建築を合わせ考えるとき、外壁に張られる同質のタイルやテラコッタ、外壁腰回りの石張り表現等の素材感の統一、また八角形の煙突等の各部にみられる造形的類同性などの点において、デザイン上の連続性が明らかに意図されている。しかしその一方で、個々の建物の全体的性格をみると、大隈講堂がゴシック様式およびロマネスク様式を基調とし、42mの全高を有しているのに対し、早大出版部はモダニズムを骨格とし、全高も11.77mである。先に引用した「家並と街路樹」の中で佐藤功一は、「長い街路が通つている場合には、横丁の有る毎に、様式を変化させても宜しい」とし、「広場とか、街路の交差点」にはむしろ「変化を必要とする⁵⁴⁾」と述べている。大隈講堂と早大出版部の建築は、細部の意匠や素材感に連続性をもたせながら、積極的に様式や高さなどに変化を与えることにより、両者が醸成する美観——ゴシックの塔をもった高い大隈講堂と低層の早大出版部との対比を企図したものと考えられるのである（図15）。

（3）佐藤功一の都市美観論の特質

「地上に存する一切の営造物（法律用語たる営造物と混合せられぬ事を注意する）小にしては箇々の建物、更に小にしては家具調度、大にしては都市（都市は全体として一つの有機的営造物である）、是等を其の目的に応じて計画し且つこれを構造する技術を建築と呼ぶ⁵⁵⁾」と述べているように、佐藤功一にとって複数の建築を創造することは、都市の景観を有機的に造形していくことを意味した。しかしながら戦前の日本において建築と都市美の問題に言及した人物は、佐藤功一だけではない。藤岡洋保らによれば、都市美に関する記述は、建築・美術・都市関係の雑誌等においては、明治41年（1908）から継続して現れていた⁵⁶⁾。

たとえば美学者の黒田鵬心は、明治43年、『東京朝日新聞』に連載された「帝都の美観と建築」の中で、都市の美観を左右する最大の要素は建築であるとし、建築の美醜が周囲の建築群や都市に及ぼす効果あるいは影響によって、建築の価値が決定されるべきであることを論じている⁵⁷⁾。その意味において、黒田は佐藤の理論を先駆けていたといえる。また、建築家の片岡安は「一般に都市街路に並列すべき建築物は決して無駄な装飾を必要としない。むしろ経済的に実質本位にして堅実味を十分に発揮すればそれで足りるのであつて、それ等の建築物の集団配列が都

市の美観を形成すると考へて少しも差支はない」と述べ⁵⁸⁾、都市計画大阪地方委員会の加藤善吉は「都市の建築の不統制は畢竟するに市民の不統制を意味する、将来の都市建築は大きな全体として取扱ふ必要を痛感する」と論じている⁵⁹⁾。彼らの言に通底するのは、複数の建築造形の総合的調和として都市美を捉える視点であったといえる。しかし佐藤功一の都市美観論の特質は、次のような発言に色濃く表出されている。

(前略) 大きな建物や高い建物、赤いものや黄色なもの白いものなどが、集団をなして色とりどりに変化を見せ、しかも其の間に自ら統一があつて、是等が相接し相連らなつて美しく見えてゐる。兎角の異論はあるが、今のところ東京市中に於て、此のやうな建築の集りに依つて美しさを見せてゐるところは、こゝより外にないといつてよからう。併しこれは主要街衢の総合美ではあるが、実はこゝに言はんとするところの「街の美観」ではないのであつて、街の美観といふことは、斯やうな俯瞰の美ではなく、街路に立つて見ての美観を意味するものなのである。⁶⁰⁾

佐藤はまた、「街路の美観といふことは上から見た美ではいけない、街路の美観は街に立つて眺められる美観といふことなのであります」(「街の美観」)⁶¹⁾、「『街の美観』と言ふ事は上から眺めた美ではないのである。『街路の美観』と云うのは街に立つて眺めるを申すのである」(「街の美観論」)⁶²⁾と述べている。これらに述べられているように、佐藤にとって都市の美観は、俯瞰的な視座によって認識される総合美ではなく、街路を歩く個々の主体からの視点によって獲得される美の連景を意味するものであった。このような視点に立つとき、前述したような大隈講堂におけるピクチャレスクな手法、早大出版部におけるパースペクティブの強調および周辺街路との動的な連続性⁶³⁾、さらに両建築のシルエットの対比、日比谷公会堂と勸業銀行における同じくシルエットの対比がもたらすダイナミズム、交差点形状と建築造形の連関——これらの手法は、いずれも俯瞰的な視点からは捉えられない視覚的効果を企図したものであり、街路からの視線を前提とした、佐藤功一の都市美観論の実践例として捉えることができるのである。

とくに、複数の建築に向けられた都市美観の志向は重要であろう。たとえば先述の黒田鵬心は「建築群の美は、それを成す各建築の間に高さ、色、形、様式等の大体の一致を条件とする。区々の高さや色や、形や、様式では混雑を生じ、展覧会に非ずんば不可である」と述べていた⁶⁴⁾。また加藤善吉は、「『統一』は美的価値の根本であり本質的のものである、如何に一個の建築がよいとするも集团的に統一を欠き環境に調和せざるものは建築芸術への冒瀆である」と論じている⁶⁵⁾。これらの視点は、「統一」を一義的な前提とする点において、依然俯瞰的であるといえる。それに対し佐藤は、複数の建築間に高さ・形・様式共に差異性を与えながら、路上を歩く人々のアイ・レベルからの視覚美を得ようとしたのである⁶⁶⁾。そしてこのことは、彼の様式に対するスタンスとも無縁ではないだろう。佐藤功一等、明治後期に大学を卒業した建築家の様式認識が概ね折衷主義的であったことは、先に引用した村松貞次郎の論文でも述べられていたとおりである。佐藤の場合、そうしたエクレクティシズム(様式折衷)の方法論を、都市美を

獲得する手法にも反映させようとしていたことは興味深い。すなわち佐藤功一は、それぞれの様式のシステムを併存させ、納まりを考案し、統合して全体に至らしめる「複数原理の併存」⁶⁷⁾というエクレクティズムの原理を、単体の建築だけでなく複数の建築にむけて照射することにより、折衷主義の新たな可能性を追求しようとした建築家であったと捉えることができるのである。⁶⁸⁾

おわりに

本稿では、佐藤功一の建築・都市観の特質についていくつかの事例と言説を通じて検証した。そこで抽出された特質をまとめるならば、以下の通りになろう。

1. 都市の美観を俯瞰的な総合美ではなく、路上を歩く歩行者からの視点による美の連景として捉えたこと
2. 様式・形態・高さなどの統一よりも、むしろ異質な形態の併存がもたらす動的な都市美に着目したこと

このような都市美への志向は、それまでの明治の建築家たちによる建築一都市の認識とは位相を異にするものであった。明治期においては、専ら個々の建築の意匠に目が向けられるか、「官庁集中計画」に代表されるような国家的プロジェクトとして都市全体のグランド・デザインを構築し、そこに個々の建物を⁶⁹⁾おいていくか、のどちらかだったからである。⁷⁰⁾銀座煉瓦街の「挫折」⁷⁰⁾に象徴されるように、明治期の建築と都市の創造においては、建築家と民衆の積極的な関連性は希薄であった。したがって、明治期の都市認識のあり方を語るとき、必然的に国家的なグランド・デザインを語るか、⁷¹⁾「市井の人々」による積極的な創造意欲を語るかの二元的構図にならざるを得なかったのである。

それに対し、大正期になると、それまでの大規模プロジェクトとしての「都市計画」から、個々の建築の総合体として都市を捉える「都市美観」の探究が行われるようになる。そうしたなか、佐藤功一の都市への視線の特質は、日本の建築家にとっての、明治期の俯瞰的（スタティック）な都市認識から、路上からの視点による、ダイナミックな都市認識への転換を象徴するものであった。その「都市への視線」をここで「近代の視線」と称することができるかもしれない。しかし、その視線の像を明確に定位するには、彼の様式論および住宅論等に対し、さらに論究を重ねなければならないだろう。冒頭で述べたように、それらの論考を通じ、従来多面的な文脈に終始した佐藤功一の建築観を総合的に定位することが、本研究の目的の一つだからである。いずれにせよ、今後、東京という近代都市への認識の系図を問うとき、佐藤功一への言及は不可欠な作業とされよう。

[註]

- 1) 建築家、今井兼次の分析による（「佐藤功一博士と作品」『佐藤功一博士』彰国社、1953年、13頁）。
- 2) 村松貞次郎「早大建築科の父 佐藤功一」（『日本近代建築史ノート 西洋館を建てた人々』、世界書院、1965年）266頁。
- 3) 佐藤の出身県である栃木県についてみても、唯一現存している晩年の代表作・栃木県庁舎（昭和13）が、やはり解体の色を濃くしている。
- 4) 『日本全史』講談社、1991年、1034頁。
- 5) 鶴見祐輔『後藤新平』第4巻、後藤新平伯伝記編纂会、1938年、587頁。
- 6) 佐藤功一「帝都復興と都市建築の理想」（『佐藤功一全集』第3巻、佐藤功一全集刊行会、1931年）303頁（初出は『婦女界』1923年11月号）。
- 7) 越沢明『東京都市計画物語』日本経済評論社、1991年、9—10頁。
- 8) 小倉庫次『復興正史』宝文館、1927年、260頁。
- 9) 「営造物より見たる帝都の復興」（『中央公論』中央公論社、1923年10月）40—47頁、前掲「帝都復興と都市建築の理想」、「復興事業中の区画整理及建築物に就いて」（『早稲田建築学報』第3号、稲門建築会、1924年12月）40—47頁、「帝都復興と建築教育」（『建築新潮』1924年1月号、洪洋社）2頁等。
- 10) 前掲「帝都復興と都市建築の理想」、309頁。
- 11) 同上、303頁。
- 12) 『帝都復興事業大観・下』日本統計普及会、1930年、第18章7頁。
- 13) 『財団法人東京市政調査会四十年史』東京市政調査会、1962年、27—28頁。
- 14) 前掲『財団法人東京市政調査会四十年史』、33頁。
- 15) 同上、63頁。
- 16) 『東京市政調査会館競技設計図集』東京市政調査会、1923年。
- 17) 『建築雑誌』1969年12月号、日本建築学会、195頁。
- 18) 本杉省三・小根山仁志・小谷喬之助・逆瀬川和孝「大型公会堂への過程と役割 近代東京における演劇改良から公会堂誕生への変遷（その3）」（『日本建築学会大会学術講演梗概集E1』、日本建築学会、1995年）403頁。
- 19) 猪野明洋・田邊健雄「公会堂の発生と明治期におけるその倶楽部的性格」（前掲『日本建築学会大会学術講演梗概集E1』）403頁。
- 20) 前掲『後藤新平』第4巻、345—346頁。
- 21) なお、日比谷公園の北西側に皇居が存在することが、敷地変更の一因となった可能性も考えられよう（早稲田大学理工学部建築学科助教授、後藤春彦氏のご教示による）。
- 22) 石井聖光「音環境」（日本建築学会編『近代日本建築学発達史』丸善、1972年）1413頁。
- 23) 佐藤武夫「針金と万国旗」（『薔薇窓』相模書房、1957年）125—127頁。
- 24) 黒川兼三郎・佐藤武夫「宝塚大劇場の音響的調査」（『早稲田建築学報』第4号、1926年）1—12頁。
- 25) 佐藤武夫「室内に於ける聴感要素（オーディトリウムの音響的設計の理論的基礎）」（『建築雑誌』1930年11月号、日本建築学会）2107—2117頁。
- 26) 佐藤武夫「古狸雑言」（『早稲田学報』1951年1月号、早稲田大学校友会）10頁。なお、田辺健雄らの研究によれば、日本近代の公会堂・講堂の平面計画において、音響を考慮した釣鐘形のプランが導入されるのは、大隈講堂以降であり、その後、別府市公会堂（設計；吉田鉄郎、昭和3）、軍人会館大講堂（設計；伊東忠太、昭和9）、静岡公会堂（設計；中村与資平、昭和10）等の講堂建築に用いられるようになった（猪野明洋・足立正人・田辺健雄「オーディトリウム計画の発展について——明治から昭和戦前の公会堂・講堂の発生と発展に関する考察——」『日本建築学会大

- 会学術講演梗概集E』、1993年、645—646頁）。
- 27) 日比谷公会堂が竣工したとき、佐藤功一は演壇に立ち、「これから、この新聞紙を破り、音が皆さんに聞こえるかどうか実験しています。お聞き下さい」と言い、サーッと新聞紙を引き裂いた。すると、その音が一番後ろの席まで聞こえ、居合わせた人々が一様に驚いたという。日比谷公会堂ほどの規模の劇場で、新聞を裂く音が後ろまで聞こえるということは、当時としては画期的なことだったのである。（天野万助「公会堂の音響と照明」『日比谷公会堂 その50年のあゆみ』東京都日比谷公会堂、1980年、他）
 - 28) 『建築雑誌』1922年10月号～1923年3月号。1924年学位論文。
 - 29) 拙稿「近代建築の系譜」（明田川敏夫・米山勇『新潟県の近代建築』新潟日報事業社、1994年）12頁。
 - 30) 佐藤功一「日本独特の建築法」（『建築新報』1919年5月号、建築新報社）18—20頁。
 - 31) 佐藤功一「震災災と建築」（前掲『佐藤功一全集』第3巻）281頁。
 - 32) 佐藤功一「主として建築物より見たる帝都復興」（前掲『佐藤功一全集』第3巻）326頁。
 - 33) 前掲『東京市政調査会館競技設計図集』。
 - 34) 内藤は早稲田大学教授として、デザイン部門の佐藤功一とならび、早稲田大学の構造学への伝統を築いた（『日本の建築家』新建築社、1981年、30頁）。
 - 35) 神代雄一郎『近代建築の黎明 明治・大正を建てた人びと』美術出版社、1963年、136頁。
 - 36) 佐藤功一「都市美論」『中央公論』大正13年1月号、中央公論社、134頁。
 - 37) 佐藤功一「家並と街路樹」『新しい東京と建築の話』時事新報社、1924年、43—45頁。
 - 38) 佐藤功一「都市の美観に就て」『建築雑誌』1923年12月号、489—491頁。
 - 39) 『帝都復興事業大観・下』によれば、「内幸町の邊りに白亜の鉄筋コンクリート建造を浮び出せる勸業銀行は又復興⁽⁷⁷⁾建築中の異彩たるを疑はぬ」とあり、日比谷公会堂の茶褐色のタイルとの色彩的対比にも留意すべきかもしれない。なお、日比谷公会堂のタイル選定にあたっての佐藤の執着に関しては、深谷辰次郎「心血を注がれた市政調査会館の建築」（前掲『佐藤功一博士』、13頁）に詳しい。
 - 40) 日比谷公会堂の施工段階における佐藤功一の度重なる設計変更、特に塔屋の高さの変更についてはよく知られる事柄である。このことについては、一般に佐藤の「凝り性」によるものとされている（前掲村松貞次郎「早大建築科の父 佐藤功一」、268—269頁、等）。しかし筆者は、勸業銀行との造形的対比についての思慮が、日比谷公会堂の高さの度重なる変更につながったものと考ええる。
 - 41) 日本近代建築史における「様式の解体」については、石田潤一郎による論考がある（「日本近代建築における意匠の変遷——〈様式の解体〉期の様式史」『建築雑誌』1980年2月号、日本建築学会、14—17頁）。
 - 42) 村松貞次郎監修『日本の様式建築』新建築社、1977年、110頁。
 - 43) 藤森照信は、他に田辺淳吉、大江新太郎、岡田信一郎、渡辺仁、W. ヴォーリズらを加え、「第三世代」と称している（藤森照信『日本の近代建築（下）——大正・昭和編』岩波書店、1993年、4頁）。
 - 44) 鈴木博之は、19世紀イギリスの建築家、Sir George Gilbert Scottについて、「スコットはゴシックだけでなく、古典主義の作品も『様式戦争』の中で作らざるを得なくなっており、それらを見ると結局は当時、すでに様式が社会的な原型もしくは祖型としてもっていた力も便宜的なものにすぎなくなっていたことが知られる。彼に代表される建築家にとって、様式は建築の仕上げに用いる外套のようなものになりつつあった」と述べている（鈴木博之『建築の世紀末』晶文社、1977年、280頁）。
 - 45) そのような様式的言語の引き寄せを藤森照信は「私様式化」と述べている（前掲『日本の近代建築（下）——大正・昭和編』、110頁）。そこで藤森は「長谷部も佐藤も、元ネタの明白な歴史様式

- に表現派のセンスを自分の方法で取り込むことで長谷部式や佐藤式を生み出しているが、こうした私様式化をさらに踏み込んで究極の私様式化を果たしたのが安井武雄である」と論じている(なお、安井武雄については山口廣『自由様式への道 建築家安井武雄伝』南洋堂出版、1984年に詳しい)。
- 46) 佐藤功一「工事報告に洩ている設計に関する思ひ出」『早稲田学報』1927年11月号、早稲田大学校友会、76頁。
 - 47) 中川武「早稲田大学大隈講堂 精神のリレーを促すもの」『教育と施設』1989年25号、文教施設協会、84—85頁。
 - 48) 陣内秀信は「<門>から伸びる<軸線>の上にく左右対称>の建物を置く、という明快で象徴的な構成」が「神田錦町に登場した学習院や本郷の東大医学部をはじめ大学建築を設計する上での定石となった」と述べている(陣内秀信『東京の空間人類学』筑摩書房、1985年、231頁)。なお陣内はその理由として、「明治になって新たに必要となった官庁や大学の建物を都市のなかに置くにあたって、大名屋敷から由来する『屋敷構え』を引き継ぎながら、同時に、すでになじみとなっていた社寺建築の象徴的空間の構成とも一脈通ずる<軸線><シンメトリー>の西洋流の構成を、象徴性を要求される門から玄関にいたる表の空間に限定して導入したのではないか」と論じている(前掲『東京の空間人類学』、236頁)。
 - 49) 建築関連の書では、佐藤の没後に刊行された作品集『佐藤功一博士』(彰国社、1953年)の「作品歴」欄に「昭和2年 早稲田大学出版部(9月) 東京都新宿区戸塚町、鉄筋コンクリート造、3階建、延坪316.83坪。」の記述がある。あるいは神代雄一郎『近代建築の黎明 明治・大正を建てた人びと』での作品年表に建築名が記載されている。なおこの建築は平成3年(1991)8月に解体された。本稿は、解体以前に行った実測調査および諸資料に基づいて論考したものである。
 - 50) 同様の窓構成を持つ佐藤の作品として、三会堂(昭和2・1927)、日比谷公会堂(同4・1929)、宮城県庁舎(同6・1931)等がある。
 - 51) 東京大学生産技術研究所教授、藤森照信氏のご教示による。
 - 52) 池原義郎「万古不易を求めて……佐藤功一」『INAX REPORT No.93』INAX、1991年、5頁。
 - 53) 前掲、佐藤「都市の美観に就て」、489—491頁。
 - 54) 前掲、佐藤「家並と街路樹」、43—45頁。
 - 55) 佐藤功一「建築の話」(前掲『佐藤功一全集』第3巻)8頁(初出は『中央公論』1925年6月号)。
 - 56) 藤岡洋保・山崎鯛介「明治末期から昭和戦前の建築・美術・都市関係雑誌に示された都市美に対する考え方について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』、日本建築学会、1990年、761—762頁。
 - 57) 谷川正巳「趣味叢書にみられる都市美観について」『日本建築学会東北支部研究報告集』日本建築学会、1968年。なお、黒田鵬心は明治18年生まれであり、佐藤功一よりも7歳年少であった。
 - 58) 片岡安「都市の美観」『建築と社会』1929年7月号、日本建築協会、12—15頁。
 - 59) 加藤善吉「都市構築と新建築」『建築と社会』1938年3月号、日本建築協会、5—8頁。
 - 60) 佐藤功一「都市の構成美」(前掲『佐藤功一全集』第3巻)215頁(初出は『政界往来』1936年2月)。
 - 61) 昭和10年6月、「大東京建築祭」日比谷公会堂での講演(前掲『佐藤功一全集』第3巻、212頁)。
 - 62) 前掲『佐藤功一全集』第3巻、222頁(初出は、『都市倶楽部』1935年7月号)。
 - 63) 因みに、農学博士の大屋霊城も、街路の形状が都市美に与える影響を論じている(大屋霊城「都市風景の構成」『建築と社会』1930年4月号、日本建築協会、281—284頁)。また内務省土木試験所の藤井真造は「都市の美は街路の美が第一だ、交通の流れが静的街路に対応して動的美をなして調和して諧律的变化を与える、街路の美は建物の美が第一だ」と述べている(「都市の総合的調和と諧律的美の創造」『建築と社会』1940年5月号、日本建築協会、23—24頁)。この藤井の言説について、藤岡洋保らの前掲研究「明治末期から昭和戦前の建築・美術・都市関係雑誌に示され

- た都市美に対する考える方については、「イタリア未来派に見られるような、ダイナミックな『動き』を美の要素として重視するような視点から都市を見る」ものとして「1例しか見出せなかった」事例としている。
- 64) 黒田鵬心「浅草活動街評」(前掲『新しい東京と建築の話』)232—233頁。なお黒田は、このような条件は比較的小建築に適用されるべきものとしているが、大建築の場合においても「小建築の場合と同様、建築群としての美を成すが、高さ、色と、形と、様式的一致と云ふ事が矢張条件である」と述べている。
- 65) 前掲、加藤「都市構築と新建築」。
- 66) 但し佐藤功一は都市美における「統一」の重要性を否定してはいない。「都市美の種々相」で彼は「統一の中に変化があり、変化の中に統一があることが必要である」と述べている(「都市美の種々相」、前掲『佐藤功一全集』第3巻、206頁。初出は『都市問題』1937年7月号、東京市政調査会)。また「街の美観論」では「安い建築でも統一して建てられる時には、其処に統制美といふものがあるのである」と述べ、条件の悪い安価な建築群についてはむしろ統一が重要であるとした上で、「同一のものを建てるといふやうな場合には、適当な間隔を置いて一々締めくゝりを付け、そこに変化を見せるのである」と論じている(前掲「街の美観論」、84頁)。
- 67) 前掲、鈴木博之『建築の世紀末』、284頁。
- 68) なお陣内秀信は、明治期の東京について「建築様式の次元で折衷という表現形態をとったばかりか、洋風デザインの建築を近世の武家屋敷に由来する文脈のなかに導入し、独特の<建築一敷地>空間を創り、ユニークな都市空間を生み出した」(前掲『東京の空間人類学』、231頁)と述べているように、本論とは別の角度から「折衷」の問題を都市に向けた考察を行っており、興味深い。
- 69) 陣内秀信は、「明治の東京においては、都市の骨格、あるいは文脈はあいかわらず江戸のままにしておいて、そこに登場する個々の建物だけを洋風の目だつものにしていく場合が多い。結局、建物が連なっていく町並みや都市空間というものを考えることは当時の人々にはできなかった」と述べている(前掲『東京の空間人類学』、11—12頁)。
- 70) 石塚裕道『日本近代都市論 東京：1863—1923』東京大学出版会、1991年、30頁。都市の不燃化と明治新政府の威厳を示しうる帝都の建設を目的とした銀座煉瓦街の建設工事は、当時の大蔵大輔井上馨らの推薦によるイギリス人技師ウォートルスによって進められた。しかし、強制退去命令など住民無視の計画への反発、あるいは湿気や雨漏りなど環境面の問題、伝統的な生活様式との断絶に対する不評などの理由により、当初の計画は大きく縮小され、工事が打ち切られた。それに対し、住民たちは思い思いのデザインで自分たちの住まいを形作り、結果的に都市の景観は為政者の思惑とはかけ離れたものになった。このような事柄は、明治期の都市と建築に対する国家および建築家と民衆との距離を象徴的に示している。またその理由から、銀座煉瓦街計画については、一般に「失敗」と評されることが多いが、藤森照信は、封建都市＝江戸を超える商店街、そして文明開化の空間をもたらしたものとして、積極的に評価している(藤森照信『明治の東京計画』岩波書店、1982年、42—44頁)。なお、初田亨は「銀座煉瓦街の建設は、新しい繁華街をつくりだしたという点では、政府の意図が成功したといえるかも知れない」としながら、「しかし、その新しい町並も、政府の手から離れ、一度住民の手に移ってからは、当初に政府が意図したものは、およそ異なる町並がつくられていった」と述べている(初田亨『都市の明治——路上からの建築史』筑摩書房、1981年、150頁)。
- 71) たとえば、前掲、藤森『明治の東京計画』。
- 72) たとえば、前掲、初田『都市の明治——路上からの建築史』。
- 73) このような佐藤功一の都市への視線、すなわち路上からの都市観察の視線の萌芽は、佐藤の弟子の1人であり、都市・東京の散策の多面的な分析を体系化した考現学の創始者である今和次郎に引き継がれ、より先鋭化されていく。その具体像については、別稿で論じることとしたい。

[付記] 本稿をまとめるにあたり、財団法人東京市政調査会および東京都日比谷公会堂より資料提供をいただいた。ここに記し、謝意を表したい。

また、本研究の一部は、1996年度の日本建築学会関東支部研究発表会（1997年3月）で報告する予定である。（1996年9月脱稿）